

中勘助作「銀の匙(さじ)」を読む

- 子どもの世界とは何かを考える -

私の書斎のいろいろながらくた物など入れた本箱の抽匣(ひきだし)に昔からひとつの小箱がしまっている。それはコルク質の木で、板の合せめごとに牡丹(ぼたん)の花の模様のついた絵紙をはってあるが、もとは舶来の粉煙草(こなたばこ)でもはいつたものらしい。なにもとりたてて美しいのではないけれど、木の色合がくすんで手触りの柔(やわらか)いこと、蓋(ふた)をするとき ぱん とぶっくらしした音のすることなどのために今でもお気に入りの物のひとつになっている。なかには子安貝や、椿(つばき)の実や、小さいときの玩(もてあそ)びであったこまこました物がいっぱいつめてあるが、そのうちにひとつ珍しい形の銀の小匙(こさじ)のあることをかつて忘れたことはない。それはさしわたし五分(ごぶ)ぐらいの皿形(さらがた)の頭にわずかにそりをうった短い柄がついているので、分(ぶ)あつにできてるために柄の端を指でもってみるとちょいと重いという感じがする。私はおりおり小箱のなかからそれをとりだし丁寧に曇りを拭(ぬぐ)ってあかず眺(なが)めてることがある。私がふとこの小さな匙をみつけたのは今からみればよほど旧(ふる)い日のことであった。

家にもとからひとつの茶箆筒(ちゃだんす)がある。私は爪立(つまだ)ってやっと手のとどくじぶんからその戸棚(とだな)をあけたり、抽匣をぬきだしたりして、それぞれの手ごたえや軋(きし)る音のちがうのを面白がっていた。そこに鼈甲(べっこう)の引手のついた小抽匣がふたつ並んでるうち、かたっぽは具合が悪くて子供の力ではなかなかあけられなかったが、それがますます好奇心をうごかして、ある日のことさんざ骨を折ってとうとう無理やりにひきだしてしまった。そこで胸を躍(おど)らせながら畳のうえへぶちまけてみたら風鎮(ふうちん)だの印籠(いんろう)の根付(ねつけ)だのといっしょにその銀の匙をみつけたので、訳もなくほしくなりすぐさま母のところへ持って行って

「これをください」

といった。眼鏡(めがね)をかけて茶の間に仕事をしてた母はちょいと思いがけない様子をしたが

「大事にとっておきなさい」

といつになくじきに許しがでたので、嬉(うれ)しくもあり、いささか張合(はりあい)ぬけのきみでもあった。その抽匣は家(うち)が神田(かんだ)からこの山の手へ越してくるときに壊(こわ)れてあかなくなつたままになり、由緒のある銀の匙もいつか母にさえ忘れられてたのである。母は針をはこびながらその由来を語ってくれた。

P.7 ~ 9

中勘助作「銀の匙(さじ)」岩波文庫、岩波書店 1935年11月30日刊

- 2006年10月18日記 -